

どれみなのはなし

そのなな



もくじ

まえがき

いっしょのひとり	3
あさひはまあだ？	17
あとがき	23

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。

どれみ本の7冊目です。

8冊目じゃないのか、って？ ええと、そのへん

はあとがきでもご覧頂きたく その まあ、こ

めんなさい、ということ。

あいも変わらず、いろんな意味で恥ずかしい嘸が
続いております。苦手な方は本を閉じることをお薦
めいたします。

では、まいりましょうか

『どれみなはなし』そのなな、どうぞご覧くださ
いませ。

イラストレーション……久遠一海

酒処 金井亭亭主

猫好敬白

いっしょのひとり

11月ももつだいが過ぎて、そろそろまわりがそわそわしてん。もうお菓子屋さんやないちゅうのに、キッチンには粉やクリームでいっぱい。

ほいで、ちよいと横見ると、こっちはコゲコゲのかたまりがいっぱい。

コゲコゲの前には、ハナちゃんがちんまり座って、

「うっ〜」

って、さっきからずっとつなってる。

「ほあ、ハナちゃん。考えてもまだアめだよ。最初からやりなおしー！」

ももちゃんに教わってるから、食えんものにはならへんやろうけど

「そうそう、あいちゃん。今日は主役なんだカラ、手伝っちゃだあメーだからネ♡」

はあ。ももちゃん、お菓子のことになると厳しいからなあ。ハナちゃんも大変や。

そう思いながらキッチン出てこうとしたら、ハナちゃんががばつ、と跳ね起きた。

「ちつが〜うよ！台はちゃんとできてるもん」

指さしてる先見てみたら ああ、たしかに。コゲコゲの山やと思うたら、その中にひとつ、きつね色の丸いのがあるわ。

「スポンジまでできタのなら、あとはクリームだけじゃナイ。なに悩んでるノ??」

「あわだたないの」

くちばし、ツンと出しながらハナちゃんが言った。あたしはももちゃんと顔見合わせて、思わず吹き出してしまった。ああ、あかん。ハナちゃんジロツてにらんでるわ。

「クリームなんて簡単や。材料しつかりはかって入れたら、あとは手やのうて体いっぱい使って泡立てたらええねん」

ももちゃんがちろっ、と見てる。あたしは軽う手え振った。こんくらい、手伝わうちにはいらへんで。ハナちゃんが立ち上がって、ボールに材料入れてった。片手にボール、片手に泡だて器持って、

「体であわ立てる。からだ。からだ。せ、のっ」
右手と左手を逆に回して、すごい勢いで泡立て始めた。やるもんやなあ。ももちゃんも目え開いて見つめてるわ。

「う、うあ、うおおととととと」
あ、ありや？ なんか、動きが怪しなってきたな。まわしてるボールがへんな方向行ってるわ。それ追いかけて、よろよろ歩いてもってるやん。
「ハナちゃん。その辺でやめといた方が」
「うあひゃ！」

あかん！
だっばあん！

あちゃあ。倒れそうになったハナちゃん、とっさ

に受けとめたんはええけど、

「うあーべとべとあ〜」

あたしも一緒にクリームまみれんたってもうた。

かっぱ〜ん

ああ、よお響くわあ

MAHO堂のお風呂、いつの間にこんなん広うなったんやろなあ？ ほとんどハナちゃんしか使わへんのに、あたしと一緒に入ってもまだ余ってるわ。

湯船の横には大きな鏡、せっけん入れにはあたとハナちゃんのタップ。服と違って、洗濯機で洗うわけに行かへんしな。

んで、そのわきに　ん？ なんか大きなもんあるなあ。丸うて、穴あいて　なんやったら、これ？

いろいろ見ながらの〜んびりしとったら、湯船の向こう側から、ハナちゃんがぼっん、て声出した。

5 いっしょのひとり

「あ〜いこ、ホントにお泊りでよかつたの?」

あん? なにいまさら言ってるんやろ。

「なんや?」

「だって、だつてさ。おかあさんといっしょの誕生日の方がいいんじゃないの?」

ああ、それかいな。

そう言えはハナちゃん、あたしら——お母ちゃんがいきなりいなくなるの経験してるんやつたな。

特別な日にお母ちゃんに会えないんは、悲しい思つんも無理ないか。

「そやったら、ハナちゃんとは一緒にでけへんなあ

それでええのん?」

あたしが軽く言つたら、ハナちゃん、目玉広げて「イヤ! ハナちゃん、ちゃんとおめでとうしたいよ」

それからすぐに目え伏せてしもてん。

「でも、でもさ、ハナちゃん、あいこと毎日一緒だモン。だつたらお誕生日くらい、おかあさんにゆずつてあげなきゃダメかなあ、って」

口までお湯につかりながら、ぶくぶく言ってるハナちゃん見てたら、なんや勝手に顔がほころんでまうわ。

「ハナちゃんはええ子やなあ」

あたしは言いながら湯船の反対側まで行って、ハナちゃんのあたま、なでたげた。

「そやけど、ええんや。おかあちゃんも、まだあたしが行くのに慣れてへんから、かえつて氣い遣うてまつし。誕生日は毎年あるんやから、のんびりやつとつてもええやんか」

お湯にぬれて、なでるとするつとすべる髪が、びよこんと持ち上がった。

「そっか。だつたら、来年はゆずつたげるね♡」

ああ、元どおり、キラキラの目えがこつち見とん。やっぱ、ハナちゃんはこうでないとかあかん。

「おおきに。あははっ　ほんじゃ、もうこの話はこれでおしまいや。さあハナちゃん、あたま洗うたるわ。一緒にあがる」

あん？ なんか、ハナちゃんいきなりむくれてもうたな。 あ。 はっは〜ん。

「ほおら、ハナちゃん。ちゃんとシャンプーせな、あかんて」

先あがって、ハナちゃんの両肩をよいしょ、と引つ張り上げたら、湯船の端っこにしがみついでてもた。

「ぶう〜、やあだあ！ ハナちゃん、おぼうしないとダメなの!!」

やっぱそつや。あの大きな丸いもん、シャンプーのとき使うぼうしやったんなあ。

「ハナちゃんもつ6年生やろ？ そないなこと言わんと、ほら、目えしっかりつむつとつたら、なんも痛ないって」

わきの下抱きかかえて、よいしょと持ち上げてからそのまま座らせて。ええと、シャンプーはつと

「だめ〜っ！ だめダメだめダメだめえ〜っつうぎゃ!!」

髪の毛多いからなあ。シャンプーするんはひと苦勞やな。

「いった〜あい!! いたいイタイ痛いいい〜ツツ!!」

ああ、そやから目えつむつとれ、言つたんに。

「もう、すぐ流したるから」

「もう、イヤツ！ ハナちゃん、痛いのなくすつ!!」
言いながら、ばつ、と手えのばして、何かつかん

できた。ああ、あたしのタツプが落つこつてるやんか。ちゅうことは、いま握つたん うあつ!!

「ちよ、ちよい待ちや。なんで見習い服なんか落ちたタツプ拾って振り向いたら、ハナちゃんも

う着替えおわつてた。目えつぶりながら、両手ぐるぐるまわしてん。ま、まさか!?

「痛いのお〜ぜんぶう〜消えちゃええつ!」

あ？ わ！ な、なんやあ!?

「あれ？」

いてっ！ たたた。ああ、もう。ハナちゃん、いきなり魔法使つてはじき飛ばすんやもんなあ。

7 いっしょのひとり

「あれ？あゝいこ？」

ん、なんや声遠いな？

「あゝいこ、どこいったの？」

どこで

んあ？なんでこんな暗いんや？ハナ

ちゃん、電気まで消してもうたんか。ツたく、しゃあないなあ

ちよい待ちや。いま昼間やないか!?

「あれれ？どこ行っちゃったのかな?？」

ああ、後ろに明かりが って、どああ!! なんで

ハナちゃんが窓の外におるんや!?

「もう上がっちゃったんだね。せつかちさんだな」

ちやう、ちゅうねん!

もつ、こんな窓どこにあったんや？ 開けるすきま

もあらへんし ええと、他に入るとこは

ありや？ 後ろにぼあつと見えるんは、湯船や

んか。シャワーもあるし ってことは、これ窓や

ない、鏡やん!?

「ハナちゃん、もうちょっと入ってくう」

だゝゝつツ！ ハナちゃん待つてえな!! ここから出してえ!!

はあ、なんとかタツプつかんどってよかつた。そ
うやなかつたら、はだかんぼのまんまやったわ。

あたしの目の前の鏡には、もうハナちゃん映つて
へん。ちよつとヒビ入ってるんは、さつき体当たり
したせいや。魔法も使ってみただと、まるつきり効
かへんなあ。ハナちゃん手かげんなしでやつてもう
たんやな。

それにしても あゝあ、ひとりぼっちなつてし
もたなあ

どうやら、ここの作りはMAHO堂とおんなじみ
たいや。そやけど

「電気はないんかあ」

スイッチばちばちやつても、明かりがつかへん。

まっくらな中、明るいはあっちこっちの鏡。向こう側の明かりが入ってきてるんやな。

うすぼんやり明るいだけ。真っ暗いよりましやけど やっぱ、あかんな。暗いところにひとりやと、いろんなこと考えてまうわ。

いつもはみんなと一緒やから、考えるヒマもないけど、考えなあかんこと。

「あたしも、大人になるんやろなあ」

ついつい言葉になつてる。ひとり言なんて、あんま言つたらあかんのやろうけどな。

「おんぶちゃんは女優、ももちゃんはお菓子屋さんかあ」

二人とも、もう今すぐでもできそうや。あたしはあたしは、どうなるんやろなあ。

お母ちゃんのとこ手伝いに行つて、介護ちゅうんが難しいのはよあわかつたわ。これから、お母ちゃんと一緒に、助けあって、支えあって そんなん

できるんやるか？ あたしは、あたしはやりたいこと、あつてええんかな？

あかん。考えてたら寒なつてしもた。ああ、だれがおれへんか？ もうだれでもええ、この際パパでもええわ。暗いともういたない。明かりは、明かりはどこや!?

「おんぶ、おつそい！」

わたしがMAHO堂に入つて、すぐ飛びついてきたのはハナちゃんだった。

「ごめん、ちよつとお仕事入っちゃつたの。また後で出なくちゃいけないけど」

あゝあ、むくれちゃつて。まあ、これはこれでかわいいんだけど。

あら？ そういえば、今日のケーキはハナちゃんが焼く、つて言つてなかつたかしら。

9 いっしょのひとり

「ハナちゃん、バースデイケーキはできたの？」
とたんにぱつと離れてにつこり笑ってVサイン。

「もうバツチリ！」

「なあにが『バツチリ』なんだか」

トントン、と階段のぼりながら、どれみちゃんが
声をかけてきた。

「スポンジはなんとかなったけど、クリームひつくり返しちゃって、結局最後はももちゃんにデコレーションしてもらったんじゃない」

「てへへへ。失敗しつぱい」

ハナちゃん、頭をかきながら照れ笑いしてる。登ってきたどれみちゃんが、やれやれ、って顔してたけど、ふいにぎよるぎよる見回して、

「そういえば、あいちゃんは？」

あら？

「あいちゃんが、どうかしたの？」

言われてみれば、どこにもいないわ。声も聞こえないし。

「うん、そのクリームひつくり返しちゃったとき、あいちゃんが巻き添えになっちゃたんだよ。で、さっきまで二人でお風呂入ってたんだけど」

ちろ、つと二人の視線が重なった。

「知らなくいよ。ハナちゃんより先に上がっちゃったんだもん」

変ねえ。ハナちゃん置いて上がっちゃうなんて、あいちゃんらしくないわ。

「あら？あいちゃん、まだお風呂じゃないの？」

声のほうを見たら、洗面所の方からはづきちゃんが顔を出してた。

「まだお洋服の洗濯 終わってないけど」

わたしは、ちよつとだけ嫌な予感がした。目の前にある、ぱんぱんにふくらんだバッグ、これってたしか

「ハナちゃん、あいちゃんはいまなに着てるの？」

「え？ううん わかんない」

「今日はお泊りだから、着替え持ってきてるんじゃない」

ナイの？」

キッチンの方から顔出したもちちゃんが言った。そう、わたしもさつきまで、そう思ってたんだけど

「このバッグ、あいちゃんよね。開けたようには見えないわ」

「ちよ、ちよっと待っておんぶちゃん。それって、まさか」

はつきちゃんが真っ赤な顔で言った。わたしは軽くうなずく。

「あいちゃん、はだかのままどうか行っちゃったってこと？」

いや、問題はそうじゃなくて。

わたしはちよっとだけ頭をおさえながら、お風呂場に行ってみた。

ドキン、ドキン、ドキン

はあ。ようやく心臓の音がいつもみたいになっただわ。ずいぶんかかってしもたなあ。

あたしは、店の大きな鏡の前でしばらくしゃがみこんでた。ここが、一番明かりが入ってきたからや。

ちよっと落ちついてみると、いろんなことがわかってきた。たとえば、どこの鏡も、もとの鏡とつながってるとか。

あたしの右手には、ハナちゃんの部屋から借りてきた手鏡がある。思ったとおりや。持ち歩いてても、鏡の向こうはハナちゃんの部屋が見えてん。

あたしは、手鏡を懐中電灯がわりにかざしながら、MAHO堂を歩き回ってみた。

歩き回ってわかったんは、明かりがないだけで、あゝるもんみんなちゃんと動くこと。キッチンのコンロにオーブン、お風呂場のシャワーに湯沸し、トイレも洗面所も使えるし、冷蔵庫の中には食べ物まであるわ。

「いきなり大ピンチ！っちゅうこともないみたいやな」
そやけど、はあ

「なんも、誕生日にこないなことならんでもええのになあ」

おまけに、いつもと違ってひとり

「だあ〜ああツツ!!」

はあ、はあ あかん。ひとり、ちゅうんは当分考えんようにせんと。

お風呂場には、ミミとロロがいた。わたしに気づいたロロが、差し出した手のひらに飛び乗ってくる。

「ロロ、ぶつしたの？」

「ロ、ロロロ、ロ〜ロ」

え、ミミの手伝い？ そっか、ミミもあいちゃん探してるんだ。

「ミ〜」

ミミが鏡の前で何か言ってる。わたしはその鏡をよく見てみた。

「ひび？」

鏡に、いく筋かのひびが入ってた。でも普通のひびじゃないわ。だって、太いひびの向こうには、わたしが映ってない。映っているのは暗いお風呂場だけなんだもの。

鏡を見ながらいろいろ考えて、決めた。

「ロロ、ミミ。お願いがあるんだけど」

「間違いないよ。あいちゃん、ハナちゃんの魔法で飛ばされちゃったんだ！」

店の大きな鏡の前に戻って座っていると、向こうではみんなが集まって話とった。

「もあう！ハナちゃん、めーだよ」

「ごめんささい
しよんぼりして、ちよつとかわいそうやな。どれ
みちゃん、あんま怒らんといてや。」

「あやまるのは、あいちゃん見つけてから！じゃ、
みんなで手分けして探そ　あ、あれ、おんぶちゃ
ん？」

風田場のほうからおんぶちゃんが歩いてきた。肩
にミミと口口乗っけて。ミミ、何してんやろ？

「おんぶちゃん、いままでどこ行って　って、ちよ
ちよつと、どこいくの？」

おんぶちゃんはそのまま店の出口に歩いてってる。
あ、ドアんとこで振り向いたわ。

「ん？　わたし、お仕事だから。それじゃ」
ぱたん、って閉まったドア見ながら、みんなあつげ
に取られてんなあ。　にしても、えらいあつさり
やな。ちよつことは

「おくんぶ、どうしたんだろ？」

ハナちゃんがぼそ、ってつぶやいてる横を、ミミ

と口口がふわふわ飛び回ってる。　んにや、ミミ
と口口だけやない。

「なに、ニニ？　口口についてくノ？」

「レレ、あなたも？　いったいどうしたの？」

「ドドも!?　ちよつと、なにがどうなってるのさ!!」
妖精がひとかたまりになって、なんや、テーブル
の上でゴソゴソやってんだけど、ん、ここからやと
見えへんなあ

「ええええツ!!」

な、なんや、なんや!?

「どれみちゃん、声大きい！　マジヨリカに聞こえ
ちゃうよ」

「ごめんごめん。　わかった。じゃ、あたしたち
はそのまま準備、ね」

え、え？　ちよつと、みんななんでキッチンこもっ
てまうんや？

お、い、あたし探さんでええのかあ!?

そのまま夜。あたしは、店の鏡の前にすわっとつた。真ん中の大きなテーブルにはケーキに食べ物。ケーキの上の口ウソクは、あたしの12本とミミ用の4本。そやけど、みんながおれへん。

さつきまでパーティの準備で忙しそうに走り回ったとつたけど、今は電気も消してしもて、こつちと同じくらい薄暗い部屋や。

わからんのは妖精やな。あつちこつちの窓やらなんやらに貼り付いて、なにしてたんやろ？ミミもさつきこの鏡に頭ぶつけてたしなあ。まあ、ええか。

ハナちゃんの部屋から持つて来た手鏡には、カラのベッドが映ってる。まだ部屋には戻ってへんみたいやな。はあ、みんなどこ行ってしもたんやろ？

不思議なもんや。また薄暗い中でひとりになつてもうたんに、昼間と違って、心臓ばくばくせえへん。

慣れたんかな？　どんなことでも、慣れていけるんやつたらええんかもしれへん。けど。

そう思いながら鏡の向こう見てたら、へんな光が浮かんでた。ヒヨイヒヨイ、って動いて、あたしが近づいたら消えてまう。何やるなあ、思てまた座つてみたら、同じところに光が　ん？あ！この手鏡や。

「そつかあ。あつちの光、鏡でなら跳ね返せるんやな」
 そうとわかれば、あとは来るのを待つだけや。

みんなはだませても、あたしはだまされへん。絶対、来る。

カタッ

ほあら、来た来た。

「あら？」

あつちの月の光、ハナちゃんの手鏡に当てて、ドアの前に立ってる顔に

「何かしら、いまのひかり」

たのむで。氣いついてや!!

「ひかるものなんて、ないわよねえ」

もうちよつとや、おんぶちゃん、氣づいてえな!!

「まただわ。いまの、あの奥から あ、鏡」

こつち見とる、いまやー!

「おんぶちゃん、おんぶちゃん、おんぶつちやあああ
ん!!」

これであかんかったら、もう、もう

「のど、見えてるわよ」

え ?

目えあげたら、目の前におんぶちゃんが映ってた。

「ふふふ。みいつけた」

「おんぶちゃん」

なんや氣い抜けて、ちよつと涙出てしもた。

「わたしの声は聞こえるのね? それじゃ話はあと。

抜け出すのもね。とにかく、もう時間がないんだから。

よ いしよ、つと」

目の前がぐらぐら、つと揺れた思たら、だんだん
テーブルが大きくなってん。

「おんぶちゃん? 鏡運んでんのんか?」

「ふう。じゃ、火をつけるわよ」

12本のあかりが、目の前についた。

「吹き消すのは無理よね。いいわ。せーの、で一緒に吹こ?」

せーの、つて息を思い切り吸い込んで、

「ふっ」

ロウソクの火が全部消えたとたん、ぱつ、とあかりがついた。

「おめでと〜」

なんや、なんや?

「ハナちゃん、いつけえつ!」

「あいこをお〜かがみからあ〜出してえつ!!」

う、うあ、うわあああ っ!!

引つ張られたあたしが、鏡にぶつかる思てぎゅつと目を閉じたら、顔から何かにぶつかった。ガラス

みたいに冷たくない、床や。出られたんや!!

パーティの真ん中、ケーキの周りには、ミミたち妖精が座ってた。

今回は、ずいぶん働かせてもうたから、あたしからのお礼や。さっき、鏡に頭ぶつけてたんは、あたしがどの鏡にいるか調べるためやったんやな。そやけど、

「どれみちゃんたちひどいなあ。わかってたんやつたら、もっと早う出してくれたってもええのに」

「ごめ〜ん。実はさ、口口に止められてたんだよ」
頭かきながら、どれみちゃんがケーキのほう指さしてる。

「口口に?」

ちらつ、と指の先見てみると、他の妖精の後ろにかくれて、そっぽ向いてん。

「そつ。おんぶちゃんが戻るまで、だめ〜ッ! っつ」

「わたし、そんなこと頼んでないわよ?」

「きつと、口口が気をきかせたのよ」

はづきちゃんが、レレと顔を見合わせて、くすくす笑うてる。

「まあ、助かったんやからええけどな」

とりあえず話切つて、他のみんな見てたら あ

れ、おんぶちゃん、手えケガしてないか?

じ〜つと見てたら、

「あ えへ、バレちゃった?」

「なにやつたんや、それ」

「ちよつとね」

むかつ

「まあそんなん言つて! ちゃんと言わなわからへんてあれほど」

ダンッ、って机たたいて近寄つたあたしの前に、おんぶちゃんの手が出てきた。

「スト〜ップ! 今のセリフ、わたしが言いたいのよ」

え？

「ハナちゃんから聞いたわ。なにか、悩んでたでしょ。

お母さんのこと？ それとも、将来のこと？」

あ
！

「わたしは、女優になる。みんなもいつか、やりた
いこと見つけて、それに向かって進んでいくわ」

考えてたことズバリ言われてしても、あたしはう
まく言葉が出えへんかった。

「でもわたしは、みんなを信じてる。いい、あいちゃ
ん？ わたしは、みんながわたしを信じてくれるの
も、信じてるの。あいちゃんが鏡の中でわたしを待つ
てくれるのも、ね」

そや。あたしも、信じてた。おんぷちゃんは絶対
に戻ってくるて。

「いる場所はちがって、みんなみんなひとりでも、こ
ころはいつしょよ。」

だからわたしたち、大親友なんでしょ？」

なんや、目の前がにじんでるわ。みんながあたし

の肩や首に抱きついてる。ああ、もうこれ以上、な
んも欲しいものなんてあらへん

「ところデ、なんでまだ見習い服着てるノ？」

ももちゃんの不思議そうな声で、あたしは現実に
戻った。そういえば、なんで変身してたんやったか
な？

「ああ、せやな。それじゃもとに

「ちよ、ちよつと待ってえつ!!」

なんや、はづきちゃんにあわてて あ。

「しもたああッ!!」

みんなの笑い声の中、風呂場に走るあたしの背中
に、ももちゃんの声が追ってきた。

「あいチャンごめ〜ン！ わざとじゃないノお!!」

「信じられるかいッ！」

それでも、大親友やけど、な。

— おわり —

あさひはまあだ？

えた。

「なんだ。あいちゃんか」

わたしはまくらがわりなわけね。

それにしても、よく寝てるわ。

「いまなら、なにしてもだいじよぶかな？」

「ふふふ。う、そ。あいちゃんが嫌がることなんて、わたし絶対しない。」

「ん、ん、ん」

あ、あら？あいちゃん、おふとんの中に、またもぐりこんじゃった。さっきの、聞こえちゃったのかしら？

信用ないのね。

「あ」

「ん？なに？」

「おんぶちゃんの匂いやあ」

「

ペシッ

「いたあ」

そんな嬉しそうに言わないでよ。もう。

目を開けたら、暗い天井が見えた。

わたしの部屋じゃない。ここは そうだわ。あ

いちゃんのバスデイパーティやって、そのままM A H O 堂におとまりだったっけ。

「ん、ん、ん」

首だけでのびをして、部屋の中を見回してみる。

まっくらな中、みんなの頭がぼつん、ぼつんと見えるわ。ベッドの上にハナちゃんどれみちゃん。奥のふとんにはづきちゃんとももちゃん。あとわたしと

しと

「ん、ん？」

なんか、おなかのあたりが重いわ。なにか、乗っかっているみたい。なにかしら

「ん？」

おふとんをめくってみたら、おつきなおでこが見

しばらく暗いおふとんの中、見つづけてたら、ちょっと目が慣れてきた。あいちゃんをつむじがはつきり見えるわ。

ちよん、とさわっても 起きないわね。それじゃ。

起こさないように、そおっと髪に手をあててみた。あいちゃんの髪はあまり長くないけど、さわるとするっとして気持ちいい。

ぴん、とはねた前髪、肩のあたりでふわっと開いた毛先。

さわってるうちに気持ちよくなってきちゃって、つくくちやくちやくってやりたくなった。けど、そこまですたら起きちゃうわね。がまんがまん。

そのままなでてたら、わたしの脇から背中ですうっ、とすべってきた。背中に腕回しちゃったのね わ

たし、本当に抱きまくらになったみたい。

でもなんか、ひさしぶり。

あいちゃんが抱きついてくるなんて、あんまりないことだから。

そう、いつも私のほうが抱きついてるんだものね。それも、あまり人前でできないから、チャンス狙ってるのに。

「抱きたいなら、いつでも抱いていいのに」

カサッ

あら？ いま、なにか音が ああ、はつきちゃんっ
たら、ふとん蹴飛ばしちゃって。かけなおしてあげた
いけど、今動いたらあいちゃん起こしちゃうし。う
ん、と

え？ いつのまにか、ふとんが元に戻ってる。けど
頭が見えないわ。 まあ、いつか。はつきちゃん、
けっこう寒がりだったのね

やだ。

まあるい頭が、わたしのおなかにすりついでる。

ちよつと、よだれ出ちゃったね。わたしのパ

ジヤマのすそで、かるく拭いてあげよ。

そのまま、ほつぺたを両側からなでてみた。

「ふふ やっぱり、かわいいな」

そう、わたしより、ずつとかわいい、って思う。

かわいく見せてるんじゃないかって、見てるだけで
かわいい。

クラスみんなも、そのうちわたしじゃなくって、
あいちゃんがかわいい、って思うようになるのかもね。

いつか、あいちゃんも恋するのかな？

いつか、わたしの知らない男の子のことばかり考
えるようになるのかな？

いつか、わたしの知らない場所にいつっちゃうのか
な？

やだ、やだ。

やだやだやだやだ。

「むゝ むゝ、むゝむゝ」

変な音にはつとした。わたし、いつのまにかあい
ちゃんのあたま、抱きしめてたんだ。ぎゅつ、て。

「ごめん。でも」

でもね。あいちゃんは、このままいてほしいな

わがままだって、わかっている。でも、それでも。

ああ、顔が上に向いたわ。ふふふ。こんなことで
嬉しくなるなんて、なんだか、ちつちやなハナちゃ
ん抱っこしてたときみたい。

なにか、もごもご言ってる。なあに？

「りゅ がく ほんまするん ?」

え？りゅ りゅうがく？

よく見たら、あいちゃんの目に、ちよつとだけ涙

が光ってる。

「おん　ちゃん　」

留学って　わたし!?

そのとたん、あつ、と思った。そうよ、まえみんなに言ったじゃない。「英語の勉強なら、留学が一番ね」って。わたしの未来。わたしの夢のために。

そうよ。あいちゃんにも未来がある。あいちゃんにも夢がある。未来も夢もないあいちゃんなんて、ただのお人形だわ。

わたしの大切なあいちゃんは、お人形なんかじゃない

「ごめん。ごめんね」

わたしは、目の端にくちびるを寄せて、涙を舌ですとすくいとった。　しよっぱい

あいちゃんのおじ。あいちゃんの悲しいおじ。あいちゃんの未来のおじ。

甘くなくても、しよっぱくても、これがあいちゃん

なんだもの。

「うん。ぜんぶ受け止めてあげる。なにもかも、ね」

パサッ

あら？　また音が　今度はももちゃんの顔がいな
いわ。ふとんが持ち上がったってし　きょうつて、そ
んなに寒いのかしら？

「うう　ん　」

ああ、いつけない。ちよつとのびすぎちゃったみたい。

あいちゃんの腕が、わたしのからだを追いかけて
きてる　ほんとに寝てるのかしら？

ために、おでこをピン、って　えい！

「んうん　」

あはは。頭をぶるぶる振っちゃった。けど、また

わたしのおなかにすり寄ってきてる。

「おんぶ ちゃあん」

なあに？

「おんぶちゃん いくらあ？」

寝ぼけてるわ。どんな夢見てるのかな？

「ただでいいわよ」

うそうそ。あいちゃんからは、いままでにいつぱい、いっっぱいもらっているんだもの。あいちゃんがあいちゃんのままなら、それだけで、ただなんかじゃないわ。

そう、これから大きくなって、大人になって、別の道に進んでいって。恋をして、結婚して、子供ができて、それでも、それでも。

あいちゃんにもらった、わたしの中のあいちゃん、きつといつでもそばにいてくれる。

わたしが元気なとき、だまってそばにいてくれる。ただ、それだけ。それだけが、とっても嬉しい。

「でも、たまには抱きたいな」

そこにいる、って、感じたいな

ガッツ

もう！ あら？ふとんはだいじょぶみたいね。

だけど、どれみちゃんがいないわ。ううん、ハナちゃん以外みんないない。みんな、そんなに寝相悪かったのかしら？

「あのお さ」

え？

いきなり、すぐそばから声が聞こえた。そっちをみたら、いつの間にか目の前にどれみちゃん。はづきちゃんたちのふとんの足元からくび出して、困った顔してこっち見てる。

その横には、はづきちゃんとももちゃんが並んで

る。 なに？その、なにか期待するような目は

「おんぶちゃん、さっきからなにやってるの？」

え？なにって あ!!

今までつぶやいてたひとり言が、頭の中をさくつとかけめぐった。

おもわず起き上がったら、おなかにしがみついている腕が、また、きゅっ、ってしまった。

胸の下あたり、あいちゃんの寝顔が埋まってる。

あは は あははははは

「あ、あさひは、まあだ？」

—おわり—

あとがき

7冊目のどれみ本、実は11月のぷにケでお出ししました「ろくてんご」の完全版だったりします。ここまでお読みになった方はお分りの通り、「いっしょのひとり」と「あさひはまあだ？」はふたつでひとつの噺なのです。中途半端な品をお持ちになられた方々、申し訳ありません_(_)_

では以下、ちょっとだけコメントを。

- 『いっしょのひとり』
 - あいちゃん's Birth Day 2002年版。鏡の中からパーティの準備を見てるあいちゃん、っていうのが最初に頭に浮かんだ絵でした。
 - バースディケーキ、去年の小噺ではミミに作ってもらいましたが、今年はハナちゃんです。きれいにコケてくれたおかげで、お風呂シーンが自然にできました。ほんとは覚えのよい子ですから、落ちついてやればなんでも作れちゃうのでしょけどね。
- 『あさひはまあだ？』
 - 恐怖の電波噺。主に書いている側にとっての恐怖です。全身カユくなる上に、神経すりへっちゃいます(^_^;)
 - ハナちゃんを加えるかどうかはかなり迷いましたが、最終的には爆睡に決定。起きていると、きっとミモフタもない一言がでるでしょうから

では最後に、この本を手にした(手にしてしまっただ方も含めて)すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭